

## T. S. エリオットの詩劇における女性の描写

### The Descriptions of Women in T. S. Eliot's Poetic Dramas

古 賀 元 章

Motoaki KOGA

英語教育講座

(平成22年9月30日受理)

#### はじめに

T. S. Eliot (1888-1965) の代表的な詩劇として, *Murder in the Cathedral* (1935), *The Family Reunion* (1939), *The Cocktail Party* (1950), *The Confidential Clerk* (1954), *The Elder Statesman* (1959) が書かれている。1935年の詩劇では, 主人公の殉教を目撃するにつれて, コーラスのメンバーはこの殉教の大切に目覚めるようになる。そこには, 主人公が救済される信仰の世界と, コーラスのメンバーが救済される世俗の世界が認められる。他の四つの詩劇は, これら二つの世界の望まれるあり方が日常生活の身近な問題へ焦点を移して追及されている。

その際, 軽視できないのが女性の存在である。では, 上述する五つの詩劇の中で女性がどのように描かれているのであろうか。本稿の目的はその点について検討することである。<sup>1</sup>

#### 1

1934年, エリオットはロンドンで教会を建設するため, 宗教的テーマの野外劇 *The Rock* を書いた。この野外劇は, 批評・公演・観客・聖職者のいずれの面でも好評であった。同年の夏, 彼はこの野外劇を観たチェスターの George Bell 主教から, カンタベリー祝祭を記念した宗教的詩劇の執筆を依頼された。翌年, この宗教的詩劇が *Murder in the Cathedral* として発表された。彼が重視したのは, 1170年にイギリスのカンタベリー大聖堂で殉教した大司教 Thomas à Becket (“The Aims of Poetic Drama” 11) と, 彼の言動を見つめるコーラス (Browne 39) である。

ここでは, 登場順にコーラスとベケットの言動に注目してみよう。この詩劇の第1部は, コーラスが寺院に来てこれから起こる不吉な出来事を目撃しなければならないという台詞で始まる。このコーラスは, Macgill が分析するように (292-93<sup>2</sup>), カンタベリーの3人の貧しい女たちによって構成されている。マクギルの分析を参考にして, 冒頭に続く第一部の彼女たちをそれぞれ, 「第一の女」(ll. 9-17; 239), 「第二の女」(ll. 18-29, 42-46; 239-40), 「第三の女」(ll. 30-35; 240) とする。そこでコーラスは, これら3人の個別の声と, 彼女たちが一緒に歌う合唱の声 (ll. 36-41, 47-50; 240) を伝えていることになる。「第一の女」は現在の黄金の10月から灰色の11月への経過を心から受け入れることができない沈んだ気持ちを抱いている。「第二の女」は, ベケットが帰国しても, 自分たちの生活がよくなることを心配している。「第三の女」は7年ぶりに帰って来る彼の運命(死)を予感している。このように, 3人の貧しい女たちは共通して, 内面の動揺を隠しきれないでいる。

その後, 使者が現れて, ベケットが到着することを知らせる。それを聞いて, 「第三の女」は彼の死を予知するし, 「第二の女」は不吉な出来事を心配する。ついにベケットが現れ, しばらくして, 彼の目の前に

4人の誘惑者が登場する。第一の誘惑者は、昔の楽しかった世界へ戻るように述べる。第二の誘惑者は大法官に復帰して、政治的権力と栄光を獲得することを勧める。第三の誘惑者は、中央国家を打倒することを提案する。第四の誘惑者は、死後の栄光が得策であることを進言する。ベケットは、私利私欲に基づく4人の誘惑をすべて退ける。

こうした一連の光景を目撃した3人の貧しい女たちの動向を見てみよう。「第二の女」は、今までの生活の仕方が本当の幸せでなかったことに気づく。「第三の女」は、ベケットの死が神の計画によるもので、回避できないことを自覚する。3人の貧しい女たちによるコーラスは、ベケットがカンタベリーに帰国しないことを願っている。なぜなら、ベケットが帰国すれば、身の破滅が彼ばかりではなく、自らにも待ち受けていると、彼女たちは感じているからである。

*Murder in the Cathedral* 第2部も、コーラスの台詞で始まる。3人の貧しい女たちは、イエス・キリストの殉教による地上の平和に言及して、この種の殉教と出来事を意識して何かを待っている。イギリスの国王ヘンリー二世の配下にある4人の騎士たちがカンタベリーの寺院に現れる。彼らはベケットが国王から受けた恩を忘れていてと非難する。彼は、この非難に対して任務を全うしていると言い返すものの、4人の騎士たちから殺害される。

この殺害現場を見たカンタベリーの3人の貧しい女たちの動向を再び考察してみたい。「第一の女」は、夜が去らず、昼も春も来ないことになると嘆く。「第二の女」は、ベケットの死が悪と不正の瞬間であると叫ぶ。「第三の女」は全世界が腐っていると悲しむ。その結果、3人の貧しい女たちによるコーラスは彼の殉教が現世の救済のために必要であるという認識を抱くようになるのである。

このようにして、コーラスは観客に、自分たちの精神的再生の過程を通してベケットの殉教が重要であることに気づかせようとする。当時は、後のスペイン内乱(1936-39)のような国際的な緊張感、共産主義思想のイギリス国内へ浸透、映画やラジオの普及などが見られて、国内外で不安定な社会状況であった。こうした社会状況に直面して、エリオットは、芸術家にとって必要なのが人々と社会や神との強い絆であると考えている(“Literature and the Modern World” 19-22)。

そうすると、観客の現実はカンタベリーの3人の貧しい女たちのコーラス(生活上の不安)に反映されている。また、観客が社会的不安を解消し、社会や神との絆を自覚させる方法として、彼女たちの精神的再生の過程が示されているのである。彼女たちのコーラスが自分たちの精神的再生を通してベケットの殉教を強調するのは、キリスト教を基盤とした社会再建のためであると判断される。したがって彼女たちは、世俗の人々が救済される過程を伝える代弁者であるし、彼のように信仰の世界に生きようとする人々が救済される過程を伝える代弁者でもあると言えよう。

## 2

前作から4年後に書かれた *The Family Reunion* の舞台は、北イングランドの田舎ウイッシュウッド(Wishwood)のモンチェンシー(Monchensey)家である。この家の未亡人エイミー(Amy)は、誕生日に親族を招待し、8年ぶりに帰って来る長男のHarryを当家の跡継ぎにして隠居するつもりでいる。

いよいよハリーが登場する。一同の歓迎とは裏腹に、彼は“Can't you see them? You don't see them, but I see them, / And they see me.”(292)と口走る。ハリーの的外れな発言を聞いて驚いたエイミーたちは、昔と何も変わっていないことを述べて、彼の心を静めようとする。しかし、それは首尾よくいかなかった。

後に、ハリーと母親の妹Agathaが2人だけになって話し合う機会がある。8年前の彼は、なぜか孤独感を抱き、ヨーロッパを放浪しても心が満たされなかったので、故郷に帰って来たのである。苦悩の源を探し出そうとして、彼はアガサに生前の父親について話してくれるように依頼する。彼女によれば、気の弱い父親は、高圧的なエイミーに頭が上がりず、彼女を殺そうとした。当時のエイミーはハリーを身籠っていたので、アガサは父親の行為を止めた。ハリーはヨーロッパを放浪中に、同行していた妻を船上から海中へ突き落とし殺害したと思っていた。アガサの話を聞いて、彼は父親の犯した行為を繰り返そうとしていたばかりではなく、父親の罪(モンチェンシー家の罪)を償わなければならないことも意識する。

このとき、ハリーの心境が次のように描かれている。

Look, I do not know why,  
 I feel happy for a moment, as if I had come home.  
 It is quite irrational, but now  
 I feel quite happy, as if happiness  
 Did not consist in getting what one wanted  
 Or in getting rid of what can't be got rid of  
 But in a different vision. This is like an end. (333-34)

彼は、理由はわからないが、実際とは違った幻の中で家に帰って着た感じを抱いている。彼はまた、ほしいものを手に入れたり、逃れられないことから脱出したりすることとは異なる次元での幸せを実感している。ハリーの“*This is like an end.*”という発言に対し、アガサは“*And a beginning.*” (334) と返答する。2人の間で交わされる言葉から察すると、彼は胸の内の苦しみを終わらせ、人生の再出発をしようとしている。実際、彼はモンチェンシー家の家督を弟の John に譲って、新しい人生の旅立ちをする決意である。この決意の理由が次のようなハリーの言葉からうかがわれる。

I am still befouled,  
 But I know there is only one way out of defilement—  
 Which leads in the end to reconciliation.  
 And I know that I must go. (337)

Only be sure  
 That I know what I am doing, and what I must do,  
 And that it is the best thing for everybody. (338)

彼が自覚する汚れは、モンチェンシー家の罪につながるものである。この罪を取り除くため、彼は人生の再出発をする。これは、自分の世界と同家の人々が安住する世俗の世界を「調和」(“*reconciliation*”) させることを意味する。彼が目指すのは、自分の精神的再生ばかりではなく、同家の人々の精神的再生でもある。そのことが、“*the best thing for everybody.*” という言葉に盛り込まれている。

その点で、アガサは、ハリーに心を覚醒させる重要な役割を果たしているのである。観客は、*The Family Reunion* の核心 (ハリーが人生の再出発をすることになる経緯) を理解する上で彼女の役割を軽視すべきでないであろう。

### 3

*The Cocktail Party* では、ロンドンに住む弁護士 Edward Chamberlayne が家でカクテル・パーティを開催している。しかし、当日の朝、妻 Lavinia が別れの書き置きを残して突然家を出てしまっている。そのため、エドワードはパーティの中止を出席予定者に連絡したが、その連絡が届かなかった人々が集まっているのである。

人々は雑談をした後帰って行くが、エドワードはまだ残っている見知らぬ客に、妻の家出を打ち明ける。なぜなら、エドワードはこの現状をそのままにしたいからである。妻の家出の話聞いて、見知らぬ客は、彼が機械的な生活に明け暮れて自分の人格を見失っていることを指摘する。

翌日の夕方頃、エドワードの現在の気持ちを確認するため、見知らぬ客は彼の家を再び訪問する。エドワードは訪問者に、妻が帰ってもらいたいことを伝える。そうすると、訪問者は彼に、ラヴィニアの居場所について問わないことを条件にすれば、彼女が戻って来ることを約束する。

エドワードがこの約束を守ったので、ラヴィニアの帰宅が実現する。彼女は夫に向かって、ユーモアのセンスのない男と一緒に生活した結果、自分も同じような性格になったことを嘆く。彼女も、機械的な生活に直面して悩んでいることがわかる。結局、2人は互いに不平不満な自分から抜け出せないでいるのである。

数週間後、エドワード夫婦はそれぞれ別々に、自分の症状を診断してくれる精神科医を訪れる。彼らの行

く先は Sir Henry Harcourt-Reilly である。ライリーは、先のカクテル・パーティに出席していた見知らぬ客なのである。エドワードはこの事実を知って退室しようとするが、ライリーの説得によって診察を受けることにする。彼は、症状が一般的な神経衰弱であることを打ち消して、“a loss of personality” (362) が続いていることを告白する。そのような自覚の原因となっているのが妻の家出である。彼がこの出来事によって認識するのは、妻との生活に耐えられないが、同時に妻がいなければ生きていられない、ということである。

その後、ライリーはラヴィニアを診察室に招いて、夫婦を対面させる。彼の口から、夫婦の隠し事の結果が明らかにされる。最初に、エドワードと先のカクテル・パーティの出席者である Celia Coplestone との恋愛が指摘される。しかしラヴィニアの家出をきっかけに、彼は、妻の存在が必要であることを自覚するし、シーリアを愛していなかったことにも気づくのである。次に、ラヴィニアと同じカクテル・パーティの出席者 Peter Quilpe との恋愛も指摘される。彼女はピーターから愛されていると信じていたが、彼はシーリアを愛していた。この事実を知って、彼女は失意に打ちのめされたのである。

このような2人の現在の姿を示して、ライリーは彼らに、次のような人生の処方箋を提案する。

While still in a state of unenlightenment,  
 You could always say: 'he could not love any woman;'  
 You could always say: 'no man could love her.'  
 You could accuse each other of your own faults,  
 And so could avoid understanding each other,  
 Now, you have only to reverse the propositions  
 And put them together. (410)

ライリーの人生の処方箋は、二つの命題—どんな女性も愛せない、どんな男性からも愛されない—を裏返しにして一緒にすることである。この人生の処方箋を真摯に受け入れて、エドワードは“Lavinia, we must make the best of a bad job. / That is what he means.” (410) と語る。ラヴィニアは夫の言葉を素直に受け止める。こうして、チェンバレン夫婦は自分たちの悩みを解決して仲良く帰宅する。

シーリアは胸の内の苦しみを診てもらうため、知り合いの医者のもとへ行く。その医者は、チェンバレン夫婦の場合と同じく、ライリーである。この夫婦が仲直りして帰った後、彼女が診察室に入り、二つの自覚症状をライリーに訴える。それは、人間がいつも孤独であるということと、他人や物事に対する空虚感や失敗感に償いをしなければならないことである。彼女の訴えに応じて、ライリーは二つの選択肢を提示する。一つは、何事も善意に解釈するプラス思考で生活することである。この例は、前述したチェンバレン夫婦の場合である。もう一つは、絶望から生まれる信仰に基づいて生活することである。シーリアは後者の道を選び、ライリーが紹介するサナトリウムへ行く。

2年後、前回出席した人々がチェンバレン家に再び集まり、カクテル・パーティが和やか雰囲気の中で開かれようとしている。ところが、シーリアの姿が見えない。Alexander MacColgie Gibbs から彼女の死が告げられる。アレクサンダーによれば、あるキリスト教の団体のメンバーであった彼女は、派遣された場所で異教徒により十字架に架けられたらしいとのことである。

この知らせを聞いて、ライリーはシーリアの勝利の生涯を口にする。それは、彼女が自分の苦悩を克服したことを意味するのである。言い換えれば、彼女は絶望から生まれる信仰を実行して、自らの空虚感や失敗感に打ち勝ったのである。

前作の詩劇は、悩めるハリーが希求する理想の人生の可能性と、その希求によって彼を取り巻く人々が得られる幸せな世俗の人生の可能性を示唆していた。今回の詩劇は、ハリーのような人生のその後を把握しやすくする形でシーリアを描いているし、彼を取り巻く人々の世俗の人生を把握しやすくする形でチェンバレン夫婦を描いていると言える。シーリアやラヴィニアの言動は、こうした描写内容に深くかかわっているのである。

## 4

*The Confidential Clerk* の冒頭では、ロンドンの自宅の事務室にいる主人公 Sir Claude Mulhammer が、帰国する妻 Elizabeth を空港まで迎えに行かせる前任の秘書 Eggerson と打ち合わせをする。ところが、エリザベスは予定した飛行機を中止して船で帰国し、突然 2 人の目の前に現れる。彼女は、用事があってクロードの事務室にいた現在の秘書 Colby Simpkins を気に入る。

エリザベスとエガソンが退出した後、クロードとコルビーはじっくり話し合う機会を持つ。クロードから秘書の仕事についての感想を求められたとき、彼は今の仕事に一応満足しているが、一流のオルガン奏者になれなかった挫折感があることを表明する。コルビーの表明を知って、クロードは彼と似たような経験があったことを述べる。それは、一流の陶芸家になれなかったことである。陶芸家を目指していたクロードは、無一文から財産を築いた実業家の父親から、無理やり後継者にさせられ成功している。実業家の人生が、彼の場合、求められるべき人生へと次第に変わっていったのである。コルビーも、一流のオルガン奏者になれなかった挫折感から立ち直り、順調な人生の再出発をしている。しかし彼は、クロードと決定的な違いに気づくのである。それは、彼に親子の意識が欠落していることである。

場面はコルビーのアパートへと変わる。アパートはクロードが資金を出して購入され、部屋の壁の色などはエリザベスが直させている。部屋の様子を見に来た彼女はコルビーに、壁に掛っている写真の人物と住所を尋ねる。彼は、自分を育ててくれたテディントン (Teddington) の伯母 Mrs. Guzzard であると答える。エリザベスには、結婚前に出産した男の子が行方不明であった。この出来事で記憶していたのがテディントンとガザードという言葉であったので、彼女は行方不明の息子がコルビーであると信じ込むのである。

そのとき、クロードが書類を渡すため、コルビーのアパートへやって来る。エリザベスは彼に、コルビーが探していた息子であると述べる。この発言を聞いて、クロードは妻に、コルビーがガザード夫人と自分の間に生まれた子供であると告げる。ところが、エリザベスは夫の発言を了解しない。夫婦の意見が平行線のままなので、この件の真相を明らかにするため、ガザード夫人を呼び出すことや、前任の秘書エガソンを同席させることが決められる。

ガザード夫人とエガソンがクロードの事務室に呼ばれる。夫人の証言から、コルビーは彼女と音楽家として成功しなかった彼女の夫の間に生まれた子供であることが明らかになる。コルビーは、親子関係の欠如を解決して人生を打開するため、亡き父親の意志を継ぐ決意をしていた。その決意が次のような彼の台詞にうかがわれる。

You've become a man without illusions  
About himself, and without ambitions.  
Now that I've abandoned my illusions and ambitions  
All that's left is love. But not on false pretences:  
That's why I must leave you. (517)

自分の出生の事実を知って、彼はクロードに、幻想も野心も捨て去り、偽りのない人間愛に基づく新しい生き方を見出している。それはオルガン奏者になることである。この話を聞いて、エガソンは彼に、空席になっている教区のオルガン奏者を紹介する。コルビーは彼の紹介により、この職に就いて新たな人生の旅立ちをするのである。

コルビーの出生という共通の問題をきっかけに、クロードとエリザベスには心境の変化が生まれる。そのことが次のような 2 人の会話に見られる。

I didn't think  
That you would be interested. More than that.  
I took it for granted that what you wanted  
Was a husband of importance. I thought you would despise me  
If you knew what I'd really wanted to be. (495)

And I took it for granted that you were not interested  
 In anything but financial affairs;  
 And that you needed me chiefly as a hostess.  
 It's a great mistake, I do believe,  
 For married people to take anything for granted. (495)

クロードは、自分を卑下していた偽らざる事実を告白している。エリザベスも、夫を誤解していた大きな間違いを告白している。彼らは、お互いの存在を認め合うようになって和解するのである。彼らはまた、ガザード夫人からクロードの事務所に出入りする実業家 B. Kaghan がクロードの息子であることを知らされても、その事実を異論なく了解するのである。

ガザード夫人の証言により明らかになるのは、コリビーが彼女の息子であり、ケイガンがエリザベスの息子である。この件が解決すると、コリビーはエガソンの教区のオルガン奏者となって信仰の世界に包まれて生きようとするし、クロードとエリザベスの夫婦はお互いの心のわだかまりを解決して仲むつまじく世俗の世界で生きようとする。両者の世界を誕生させるのに大きな役割を果たしているのがガザード夫人であり、後者の世界の望ましいあり方に一役買っているのがエリザベスである。

## 5

*The Elder Statesman* の主人公 Lord Claverton は、父親の財産と母親の家柄を武器に大臣まで上り詰めて50歳で引退した後、企業家（銀行頭取、会社社長）として活躍した。しかし彼は、健康を害したため60歳で財界からも身を引き、ロンドンの自宅で娘の Monica と暮らしている。

クラヴァトンは、病気の治療のためモニカに付き添ってもらい、療育所へ行くことになっている。彼女は父親のよき理解者・協力者であるが、彼は病気に立ち向かう意欲がないし、何もせず過ごすことにも耐えられないのである。

そのとき、召使いの Lambert が、Federigo Gomez という人物の来訪を知らせる。かつての友人 Fred Culverwell（現在はゴメスに改名）という名前が書かれた用紙を見て、クラヴァトンはその来客に会うことにする。昔の愛称 Dick で呼ばれた彼は、ゴメスが大学時代の友人であることに気づく。

現在、中央アメリカのサン・マルコ共和国に住むゴメスは、当地で巨額の富を築き、人々から信頼されているとはいえ、苦悩する孤独感に打ち勝つため帰国し、友人を頼って来たのである。彼は2人を結びつける大学時代の出来事を持ち出す。それは、夏の夜、クラヴァトンの運転する車が老人を轢いて、立ち去ったことである。老人はすでに死んでいたことが後で判明するが、同席していたゴメスはその出来事を目撃人なのである。ところが、クラヴァトンはかつての友人の帰国の目的がゆすりではないかと警戒する。来客に対する対応から察して、彼は自分自身に素直であろうとする勇氣に欠けているのである。

数日後、クラヴァトンはモニカを連れ立って療育所へ行ったとき、クラヴァトンは自分の過去とかかわりのある療育者と出会う。その人物は、大学時代に付き合っていた恋人の Mrs. Carghill である。彼は大学を卒業後、当時レビュー歌手であったカーギル夫人と恋愛をするが、親の反対で彼女と別れてしまう。彼女は、婚約不履行の訴訟を検討したが、相手の将来のことを思って示談で済ませる。彼女の気持ちを聞いたとき、クラヴァトンは良心の呵責を感じない。それでも、カーギル夫人は、彼と一心同体であった恋愛を大事にし、彼からの手紙を今でも読んでいる。この出会いから明らかになるのは、彼が罪の意識に欠けていることである。

クラヴァトンと旧友（ゴメス、カーギル夫人）との再会は、過去の彼の過ちを浮き彫りにする結果となっている。それは、勇氣のなさや罪の意識のなさである。2人は、単に旧友ばかりではなく、彼の欠点を顕在化するための過去からの亡霊でもあると言えよう。

クラヴァトンには、放蕩息子の Michael がいる。彼は、療育所にやって来て、外国で生活することを父親に述べる。それは、著名人の父親の庇護から逃れたいからである。

その後、モニカは父親に、マイケルが木に衝突したことを報告する。娘の報告を聞いて、クラヴァトンは、車の衝突の原因が息子の女性関係ではないかと心配する。それは、彼が思い出したくない過去の出来事（車の衝突事件、カーギル夫人との恋愛事件）を暗に意識した発言である。そこでマイケルは、クラヴァトンの

息子であるばかりではなく、心を病んだ現在の父親の内面を顕在化した亡霊でもあると判断できよう。療育所で、マイケルはクラヴァトンに、自分が父親の存在の延長のようなもので、事業の継承者にすぎないという胸の内の苦しみを吐露する。この苦しみに打ち勝つため彼が外国での生活を願望したのは、父親の頑固な利己心を改めるように知らせようとするにつながるのである。

ゴメスとカーギル夫人はクラヴァトンに、心に巣くう過去の出来事の過ちを指摘する存在である。マイケルは父親に、心に宿る現在の悩みとその悩みを克服する決心を気づかせる存在である。これら3人に会った後、クラヴァトンがどのような言動が見られるのかを考察してみたい。彼はどういうわけかブナの木の下で休んで戻って来る。傍にいたチャールズがクラヴァトンに、なぜゴメスとカーギル夫人からなぜ逃れないかと尋ねる。そのときクラヴァトンは、彼らの正体が自分の過去から抜け出して来た亡霊であると気づき、今までの空虚な人間から現実の人間へ変わっていることを述べている。

クラヴァトンはモニカとチャールズに、自分の過去の間違いを洗いざらい正直に告白した後、次のように話す。

I shan't run away now—run away from them [*Gomez and Mrs. Carghill*].  
It is through this meeting that I shall at last escape them.  
—I've made my confession to you, Monica:  
That is the first step taken towards my freedom,  
And perhaps the most important. (572)

彼は、ゴメスとカーギル夫人が示唆していたこと（勇気のなさ、罪の意識のなさ）を改悟している。彼が口に出す“the first step taken towards my freedom”は、生まれ変わった人生を歩み出す第一歩を意味するのである。“It is through this meeting that I shall at last escape them.”から、過去の人生にかかわりのあるこれらの人物に寄せる彼の愛情もうかがわよう。

マイケルが、3人（クラヴァトン、モニカ、チャールズ）のいる場所に現れる。彼は、療育者として訪れたゴメスの世話によって、サン・マルコ共和国で仕事をするつもりである。クラヴァトンは、息子の固い決意を許し、モニカに次のように話す。

This may surprise you: I feel at peace now.  
It is the peace that ensues upon contribution  
When contribution ensues upon knowledge of the truth.  
Why did I always want to dominate my children?  
Why did I mark out a narrow path for Michael?  
Because I wanted to perpetuate myself in him.  
Why did I want you to give your life to adoring  
The man that I pretend to myself that I was  
So that I could believe in my own pretences.  
I've only just now had the illumination  
Of knowing what love is. (581)

彼はモニカに、先に改悟した後に訪れる心の安らぎを伝えている。彼は、息子や娘を自分の思い通りに支配するため、彼らに間違った愛情を注いでいた利己心に気づいている。上の台詞は、この利己心を棄てて本当の愛に目覚めた彼の姿を伝えている。彼は、息子や娘に心底から愛情を寄せているのである。

このように、クラヴァトンが改心するのは、彼がブナの木の下で休んで帰って来てからである。そこは、彼が神秘的な体験をした場所であったと思われる。上の台詞で“contrition”が用いられているので、この体験は神に罪を懺悔するというキリスト教の含みがあったと言えよう（野谷 15）。

この詩劇の終わり近くの場面で、改心したクラヴァトンを見て、チャールズはモニカに次のように語りかける。

So that now we are conscious of a new person  
Who is you and me together.

Oh my dear,  
I love you to the limits of speech, and beyond.  
It's strange that words are so inadequate. (583)

彼の言葉を聞いて、モニカは次のように返事する。

I've loved you from the beginning of the world.  
Before you and I were born, the love was always there  
That brought us together.

Oh Father, Father!  
I could speak to you now. (583)

以前、モニカとチャールズの仲は良くなかった。その一因は、クラヴァトンが、後に告白したように、娘を専有しようとしたからである。しかし今では、モニカとチャールズはお互いを理解し合って、一心同体であることを実感するようになっている。

2人の相思相愛の喜びを示すモニカの台詞に注目してみたい。前半の文章“I've loved ... together.”は、チャールズを心から愛する気持ちばかりではなく、神の愛を称える彼女の素直な気持ちも伝えていると言えよう。後半の文章“Oh Father ... now.”は、クラヴァトンを本当に理解できるようになったことへの感謝と、父なる神のご加護があったことへの感謝の気持ちを表しているであろう。

ここで、*The Elder Statesman*での女性の振舞いを中心に注意を払って、この詩劇の描写を振り返ってみたい。娘モニカは、心身が病んだ父親クラヴァトンの付き添いをして療養所へ行く。その場所で、彼は学生時代の恋人カーギル夫人と再会する。しかし彼は、相手の将来を思いやるカーギル夫人に無頓着である。この再会を通して、昔の恋人に対する彼の罪意識のなさが明らかになる。彼女は、クラヴァトンの過去の間違いを指摘するための過去からの亡霊でもある。クラヴァトンは療養所内で信仰心をかき立てるような神秘的な体験をして、これまでの利己心を悔い改める。この彼の姿に感化を受けて、モニカは恋人チャールズばかりではなく父親も心から愛し、信仰心を抱くような気持ちになる。クラヴァトンの精神的再生とモニカの精神的再生は、信仰の世界と世俗の世界のどちらに属するであろうか。両方の世界の線引きは明確ではなく、救済の世界が存在するだけである。言い換えれば、両方の世界が融合した救済の世界が形成されるだけである。<sup>3</sup>このような描写に深くかかわっているのが、モニカとカーギル夫人なのである。

#### おわりに

*Murder in the Cathedral*は、主人公ベケットの殉教と、その出来事を目撃するカンタベリーの3人の貧しい女たちの精神的再生を描写している。その描写から、前者の信仰の世界と、後者の世俗の世界が認められる。*The Family Reunion*は、キリスト教的色彩を前面に押し出さずに、信仰の世界へとつながると思われる主人公ハリーの人生の再出発と、それに伴って、彼の母親をはじめとするモンチェンシー家の救済が示唆される世俗の世界を併存させている。*The Cocktail Party*では、精神科医ライリーの人生の処方箋により、主人公エドワードとラヴィニアの夫婦が和解する世俗の世界と、シーリアが恋人エドワードと別れた後に選ぶ信仰の世界が表現されている。*The Confidential Clerk*では、ガザード夫人の証言により、問題のコリビーの出生が明らかになり、主人公クロードとエリザベスは仲直りをして、世俗の世界で夫婦円満な生活を送る。コリビーは偽りのない自分を見出して、信仰の世界で幸せを求めようとする。

最後の詩劇*The Elder Statesman*は、上述した二つの世界に執着しない心の救済の世界を描写している。それは、エリオットが心の救われ方を追究した結果、行き着いた描写である。<sup>3</sup>

以上の論考から、エリオットはキリスト教的色彩の強い問題から日常生活の身近な問題へと視点を移して、われわれが直面する心の問題を扱っている。このような表現内容に欠かせないのが、言うまでもなく、主人公の精神的再生を際立たせる女性の存在なのである。



## 注

1. 本稿の記述内容は、拙著『T. S. Eliot の詩劇の研究』を参考にしていることをお断りしたい。
2. エリオットの詩劇からの引用はすべて *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot* による。括弧内の数字はこの作品全集の頁を表す。
3. 1956年のエリオットが文学批評で行き着いた結論は、文学作品と読者との直接の結びつきだけを重視することである（“The Frontiers of Criticism” 117）。この考えは、3年後の最後の詩劇における信仰の世界と世俗の世界の一体化にも適用されていると言える。

## 引用文献

- Browne, E. Martin. *The Making of T. S. Eliot's Plays*. Cambridge: Cambridge UP, 1969.
- Eliot, T. S. “Literature and the Modern World.” *American Prefaces* 1.2 (Nov. 1935): 19-22.
- . “The Aims of Poetic Drama.” *Adam* 17.200 (Nov. 1949): 10-16.
- . “The Frontiers of Criticism.” 1956. *On Poetry and Poets*. London: Faber and Faber, 1957. 103-18.
- . *The Complete Poems and Plays of T. S. Eliot*. London: Faber and Faber, 1969.
- Macgill, William J. “Voices in the Cathedral: The Chorus in Eliot's *Murder in the Cathedral*.” *Modern Drama* 23.3 (Sept. 1980): 292-96.
- 古賀元章. 『T. S. Eliot の詩劇の研究—人間愛の研究—』. 北九州：大学出版, 2003.
- 野谷啓二. 「『長老政治家』における〈告白〉の意味」『T. S. Eliot Review』3 (1922) : 5-20.

